

8 晋陽古城における近年の調査成果

常 一 民

(太原市文物考古研究所)

A はじめに

晋陽の名は『左伝』定公 13 年（前 497）の条にはじめて登場し、「秋、晋の趙鞅、晋陽に入り反旗をあげる」と見える。

晋陽城は、春秋時代の末年、晋の趙卿簡子の家臣である董安于と尹鐸が造営した。くだって東魏の覇府、北齊の別都として発展繁栄した時期があり、最終的には唐の北都として最盛期をむかえる。宋の太平興国 4 年（979）に、宋の太宗、趙光義は、火と水でこの古城を破壊した。こののち数百年、晋陽城における大規模な造営計画はなく、明の洪武 4 年（1371）にいたって、古城南関の旧址に太原県城を造営した。景泰元年（1450）には城壁外装に磚を積み、面積は 0.75 平方キロメートル。今日、晋源鎮には明代の状態が保存されている。

遺跡の概況 晋陽古城は太原市西南部に位置し、城壁と壕、寺観、墓葬の三部の遺構から構成されている。総面積は 200 平方キロメートルである。

城壁と壕は面積 20 平方キロメートルほどあり、遺跡内の古城営村の西には長さ 600m の城壁が遺存する。南城角村は城壁の西南角の上にある。地表には 50～150 cm の高さの城壁が長さ 200m ほど残っている。古城営村の中には 2 基の版築基壇があり、周囲の地面より 50 cm ほど高い。現在は民家の下になっている。古城南部には面積 0.75 平方キロメートルの明代太原城址があり、一部の城壁や城門のほか、多くの民家や寺、廟などがある。

寺観の遺跡は城壁から西へ 2 km ほどのところにある西山一帯に分布し、晋祠、天龍山石窟、天龍聖寿寺、龍山童子寺、龍山石窟、石門寺、姑姑洞石窟、蒙山大仏、開化寺連理塔がある。

地下の遺跡は、西山の東麓や東山の西麓に分布する。建国以来、5000 基以上の墓葬の緊急発掘を実施してきた。たとえば、金勝村晋国趙卿墓とその車馬坑、東太堡村西漢清河太后墓、王郭村北齊婁睿墓、隋代虞弘墓、晋源果樹場漢唐墓群、王家峰村北齊徐顕秀墓、狄湛墓、義井村賀拔昌墓、化肥廠唐代壁画墓などである。

B 既往の調査

1965 年、晋陽古城遺跡は山西省重点文物保護單位に指定された。2001 年 6 月 25 日には国務院が確定した全国重点文物保護單位となり、国家文物局、国家が公布した「15 期間百大遺跡保護総体規格項目」になった。1998 年に、太原市文物局は太原市文物考古研究所を設立

し、翌 1999 年には太原市晋陽古城研究所が発足して、古城遺跡の考古学的研究と保護を専門におこなうこととなった。

20 世紀初頭に、水野清一と日比野丈夫が古城遺跡において初歩的な調査を行い、1950 年代には著名な考古学者である宿白先生が、晋陽古城で踏査とボーリングを実施した。60 年代になると、謝元路と張頷両先生が晋国新田遺跡の発掘調査と研究にともない、古城についても初歩的な調査を実施し、『晋陽古城勘查記』を発表された。ここでは、古城遺跡の年代と建物の規模について考察しており、以後の調査研究の基礎となった。

2002 年から、太原市は晋陽古城考古工作隊を組織して、計画的な調査と発掘を開始した。ボーリングにより 20100m あまりにわたって城壁を発見し、城壁の基本的な範囲を確認し、城内ではいくつかの基壇を発見した。

(i) 踏査とボーリング調査

西城壁と城の四至 西城壁は南城角村と羅城村の高速道路料金所の間にあり、版築土は赤褐色で南北長 3750m、東西幅 18~20m ある。方向は北で東に 18 度振れている。地上に残る長さ 600m ほどの城壁以外は、すべて地下に埋没している。

南城壁は、南城角村と南北瓦窯村の城角の間にある。版築土は灰褐色で、東西長 4780m、東西幅 18~20m、方向は 108 度。この城壁の検出深度は東にいくほど深くなり、南城角村の西南城角では地上 1.5m の高さで残存しているが、そこから 1 km ほど東のところでは地表から 3.8~5.5m のところに埋没し、2.5 km 東では深さ 8~9.5m、3.7 km 東では 13.5~15m 下で検出される。

北城壁は、羅城村の高速道路料金所と西寨村の高速道路のカーブの間にある。長さ 610m 分を断続的に発見した。羅城村高速道路料金所の西北角を基点として、東へ向かう東西方向の版築 560m と、東北角から西にむかう東西方向の版築 50m 分を確認した。

東城壁は、西寨村の高速道路のカーブと南北瓦窯村の城角地の間にある。東南角を基点として、ボーリング調査により、北へ向かう 3000m 分の版築を確認した。

このように、城壁は全体に横長の長方形を呈し、東西長は 4780m、南北長 3750m である。北辺の西端は羅城村高速道路料金所を基点とし、東は西寨村高速道路のカーブまでである。西辺は羅城村高速道路料金所を北端とし、南城角村までである。南辺は南城角村を西端とし、東端は南北瓦窯村の間の城角地に至る。東辺は南北瓦窯村の間の城角地を基点とし、西寨村高速道路のカーブを北端とする。

『晋陽記』によれば、「城周四十二里、東西十二里、南北八里二百三十二歩」とある。『新唐書』地理志では「北都城左汾右晋、潜丘在中、長四千三百二十歩、広三千一百二十二歩、周万五千一百五十歩、其崇四丈」とある。東、北、南の城壁は未発掘のため、時代は不明であるが、発見した城壁は文献に見える唐代の晋陽西城と考えている。

西城壁内で発見したいくつかの版築遺構 南北方向の版築は西城壁の東 2.2 km のところにあ

り、南は高速道路と僑友路の間の境界を越えている。版築の南北長は 2000m あまり、幅は 18～20m、方向は 18 度。

東西方向の版築は 2 条。うち 1 条は 73 公路に近く、城壁の西北角から南へ 1000m のところにあり、途中断絶して 3 部分に分かれる。東西長はそれぞれ 700m、1200m、1000m、幅は 18～20m。もう 1 条は南城角村の北 1400m にあり、2 つの版築を発見した。東西長はそれぞれ 200m と 70m、南方幅は 16～18m。

数年にわたるボーリング調査をとおして、西城壁には 3 ヲ所の開口部があることが明らかになった。1 つは城壁の西北角から南へ 900m のところで、開口幅は 70m あまり。2 つめは西城壁の中央。ボーリングののち、2006 年に試掘を実施した。3 つめは城壁の西南角の北 900m のところで、康培公司院内にあたり、開口幅は 30m。底部には礫層がある。

南城壁では 2 ヲ所の開口部を発見した。1 つは城壁の西南角から東へ 760m のところで、開口幅は 4～4.2m。底部には礫層がある。2 つめは新晋祠公路の東、南街村煤黒廠付近にあたり、城壁の西南角から東へ 2000m の位置にあたる。開口部は地表下 9.5m で検出し、幅 15m。底部には礫層がある。

(ii) 発掘調査

西城壁の西北角と城壁の断ち割り・試掘 2001 年の大運高速道路建設工事にともない、山西省考古研究所と共同して、羅城老爺閣で緊急発掘をおこなった。2003 年にはその重点地の 01TJⅡT141 号グリッドを拡張し、西に 3 m 拡張したところで古城の西北角の内側部分を検出した。城壁角は版築の残存高が 2.75m あり、古城遺跡について正確な座標を提供した。

城角は版築方法を採用し、版築の 1 層の厚さは 7～10 cm、突き棒の径は 2.5 cm、突き棒の穴の深さは 0.8 cm である。版築層の下には厚さ 2.5m の包含層があり、計 11 層。各層の厚さは 10～30 cm ほど。版築層、包含層からは開元通宝、磁器の碗の底部、縄目の磚などが出土し、2001 年の発掘成果（2001 年は城壁の西側に試掘坑をあけ、城壁の下から漢晋時代の土坑 1 基を検出した）とあわせると、この城壁の造営年代は両晋と唐代の間となる。

西城壁西側の壕と城壁の発掘 2001 年の大運高速道路建設工事にともない、山西省考古研究所と共同で晋源鎮西門の外、約 500m のところで城壕を試掘し、01TJⅡT201 とした。城壕の幅は約 39m あり、地表からの深さ 4.5m、方向は 18 度である。

2006 年には、西城壁に東西方向の長さ 80m の試掘坑を設けた。発掘により、壕と西城壁、城内の層の年代の関係を解決した。

壕の試掘点は 01TJⅡT201 である。壕は 2 時期あり、後期の壕の底は現地表からの深さ 4.5m。底面中央には突出した稜があり、西側は波形を呈する。おそらく耕作面であろう。出土遺物は明清時代の青花磁器片、黒磁片などである。前期の壕の底は現地表から 7.5m の深さで、出土遺物には唐代の折沿白磁碗、碗底などがある。前期の壕の造営は唐代より下らず、後期の壕は明清時代まで使用されていたと推測する。壕と城壁の間は古城営村の生活道路で

あるため、地層の関係を徹底的に解決することはできなかった。今後継続していきたい。

城壁の断ち割りと試掘は3年にわたった。断ち割りをとおして、城壁は幾度かの大規模な改修をへていることが判明した。最初の時期の城壁は城壁全体の東寄りにあり、春秋戦国時代の陶鬲、陶豆、縄文のある土器片などが出土する。中期は城壁の中央部に位置し、土色は灰褐色で、後期の城壁は主として城壁の外側に造営する。夾雑物の多い土を使用し、紅褐色を呈するところは、後期の補修部分である。遺物と地層の関係からみると、城壁の主体は北朝時期で、唐代に補修をしている。城壁東寄りの前期の版築は、春秋時代の後期から戦国時代前期にあたると考える。

城内の試掘は、2006年と2007年に2度実施した。西城壁東側の基本層序を明らかにし、道路や水路などの施設を発見した。現在も西城壁の立ち割りや試掘を継続中である。

古城営村内の城壁の調査と発掘 1960年代、謝元路と張頌は晋陽古城遺跡で初歩的な踏査をおこなった。古城営村内の古城西城壁と南城壁の一部は地上に残っていた（残存していた城壁は、その後、70年代までに削平されてしまった）。我々は2003年にこの城址においてボーリングをおこない、3ヵ所の城壁の角を確認した（東南の角は明代の城壁に破壊されている）。西城壁の長さ475m、北城壁の長さ430m、城壁幅は18m、方向は6度。城壁の周囲には幅約38mの壕があった。

2004年、古城村内にある小城の北城壁について試掘をおこない04TJⅡT201とした。城壁の幅は16.4m、版築層は計12層、版築層は全体で1.9mの厚さをもつ。城内とその下の地層には金元時代の黒磁片があった。

この試掘坑の北部では、地表下1.7mのところにある第7層の下で版築遺構を検出した。版築層は計4層。厚さは全体で90cmある。突き棒の穴は不規則で、直径は3～12cm、穴の底部は比較的平らである。この版築遺構の下には墓坑が1基あり、副葬品はなかったが、人骨1体が見つかった。墓坑の一部は試掘坑の東壁にかかっていたが、墓坑の発掘が終了する前に壁が崩壊してしまった。出土した遺物や地層の関係から、この版築遺構は今回試掘した大明城の北城壁の時代より古いことが判明した。

2006年に再び古城営村内の小城の東城壁と壕を試掘し、06TJⅡT401とした。2度の調査をとおして、この小城は元代と明代の間に位置づけられると判断した。

城壁の下にある7つの層からは版築層を発見し、大量の北朝の瓦が出土した。最も多いのは磨研の青棍瓦で、丸瓦、平瓦、縄目の磚のほか、刻印のある平瓦や棟飾りがある。

西城壁「水門」遺跡の発掘 『永樂大典』太原府志によると、「水門、今城西晋所入之道、尚名水窓門」とある。先年の調査で、ここは城壁の開口部であったことがわかっており、2006年に試掘し、06TJⅡT301とした。開口部の幅は2.5mあり、過去に水が流れた痕跡を確認したが、後世の攪乱がひどく、道路遺構など城門にかかわる遺構は未発見である。

八演地の試掘 この試掘地点は晋祠路複線の西側100mのところ position し、僑友路の北

300mにあたる。04TJⅡT401とした。ここは地下水位が非常に高いため、試掘が地表下6mに達したところで壁がくずれた。深さ6mより浅い部分の状況は以下の通りである。

版築土は地表から0.3mで検出し、幅は12mある。黄色と黒色が互層になり、黄色土は厚さ8～12cm、土質は単純で密度は低い。黒色土は厚さ7～10cm。土質は比較的雑で、密度はやや高い。この版築土内には金末～元初の磁器片があり、その年代は元代より下らない。

C 出土瓦

近年、晋陽古城では、城壁や城門などの城址構造にかかわる部分の調査を重点的におこなってきた。発掘は西城壁の断ち割りに偏っている。こうした調査では一定量の瓦が出土したが、ほとんどは細片である。2006年に、古城営村内の小城の東城壁の発掘調査で比較的完形に近い遺物が出土し、それは磚と瓦が主体で、時代は北朝から唐代のものが多い。瓦は模骨に粘土紐を巻き付ける方法を採用しており、すべて内側から切り込みをいれていた（外側から切り込みをいれた例は確認していない）。現在、出土した瓦の時代や製作技法について系統的な整理、研究はしておらず、晋陽古城遺跡の磚、瓦、瓦当などの前後関係も確立していない。以下、発掘の過程で層位と時代が判明した平瓦・軒平瓦、丸瓦、軒丸瓦を紹介する。

古城営村内城（06TJⅡT401）

発掘中に、版築の下第7層から大量の縄目の磚、青棍瓦、平瓦、棟飾りなどの破片が出土した。この発掘では古城遺跡内でもっとも多く瓦磚が出土し、かつ刻印のある平瓦や丸瓦がある（刻印平瓦23点、刻印丸瓦1点）。

平瓦・軒平瓦 主に3種ある。胎土は精良で、表面はミガキをかけるものが多い。凹面はミガキをかけているが、布目が残る。一部には凹面に布目がない例もある。06TJⅡT401⑦:3はミガキをせず、凸面は無文、凹面はミガキをかけるが、布目が残る。端面には指頭圧痕がある。長さ36.5cm、厚さ1.2～1.5cm、広端幅27cm、狭端幅21cm。06TJⅡT401⑦は黒色磨研で、凹凸面無文。端面は二重弧文。06TJⅡT401⑦:6は黒色磨研で凹面無文。凸面に刻印があり、すべて1文字。

丸瓦 胎土が精良な黒色磨研の青棍丸瓦が多く、ミガキをかけない灰色の瓦もある。06TJⅡT401⑦:2は黒色磨研。凸面無文、凹面には布目。玉縁凸面に刻印。長さ37.5cm、厚さ1.7～2.0cm、玉縁長4.5cm。

軒丸瓦 蓮華文を主とするが、雲文が1点ある。すべて破片。06TJⅡT401⑦:12は雲文瓦当。中心飾りは斜方格で、雲文をかざる。06TJⅡT401⑦:14は蓮華文瓦当。中房に連子をかざる。連弁は豊満。

西城壁発掘地点（07TJⅡT101）

軒平瓦 胎土が精良で、凹面はミガキをかける。端面には刻んだ鋸歯文がある。

乳牛場 03TJⅡT101 発掘地点

蓮華文軒丸瓦 中房には連子をかざる。連弁は十弁で豊満。径 14.3 cm、外縁幅 2～2.3 cm、厚さ 1.5 cm。

晋陽古城周辺にある、時代の明確な墓坑と寺観遺跡から出土した瓦を紹介する。

王家峰北斉徐顯秀墓

軒平瓦 02TWBX425。胎土は精良で、凸面は黒色磨研で無文。凹面は布目がある。端面は二重弧文。長さ 35.5 cm、広端幅 24 cm、狭端幅 21 cm、厚さ 1.7 cm。

蓮華文軒丸瓦 02TWBX419。中房には連子をかざる。十弁の豊満な連弁。瓦当径 12.3 cm、外縁高 1.5 cm。

西山大仏遺跡

獣面文瓦当 中央部は瓦当外縁よりも突出する。瓦当面には獣面をかざる。瓦当裏面にはかなり深い規則的なキザミがある。TJW00422 は瓦当径 19.5 cm、外縁幅 3～3.2 cm、外縁の高さ 1.7 cm。TJW00426 は瓦当径 16.5 cm、外縁幅 2.5 cm、外縁の高さ 1.8～2 cm。TJW00423 は瓦当径 18 cm、外縁幅 3～4 cm、外縁の高さ 1.5 cm。TJW00427 は瓦当径 18.5 cm、外縁幅 2～2.5 cm、外縁の高さ 1.5～1.7 cm。

平瓦 TJW00420 は凸面無文、凹面布目。長さ 48.3 cm、広端幅 32 cm、狭端幅 27.5 cm、厚さ 1.8～2.8 cm。

丸瓦 規格は比較的大きく、数量も多い。凸面無文で凹面は布目。大型丸瓦 TJW00410 は凸面無文、凹面布目。長さ 46 cm、広端幅 32 cm、狭端幅 19 cm、厚さ 2～2.5 cm。玉縁長 2.5 cm。小型丸瓦 TJW00419 は凸面無文、凹面布目。長さ 32 cm、端幅 14 cm、厚さ 1.3 cm。玉縁長 2 cm。側面は残存しない。

D おわりに

晋陽古城遺跡の考古学的調査は、先人の業績を基礎として、1999 年に晋陽考古研究所が設立されてから現在にいたるまで十年にわたる努力により、一定の成果を得てきた。ただし、これはたんなる幕開けにすぎない。今後の道のりは非常に長く、調査も困難をともなうであろう。当然、直面する任務も大きくなる。

また、検出した城壁の年代を確定させ、城門や道路、城内の空間配置などの調査を進めなければならない。このためには、晋陽古城遺跡の調査資料を整理する必要がある。そして調査や発掘の技術を拡大し、整理研究をおこない、成果の公開展示に努めたい。社会各層のさらなる支持を獲得し、晋陽古城遺跡の考古学的研究と保護事業を推進していきたい。